

20世紀の後半から現代にいたるまでの西洋現代思想において、〈解釈学〉は現象学などと並んで一つの有力な立場を形成してきた。そのなかで、神学や宗教哲学を含めた広い意味での〈宗教思想〉も理論的支柱を解釈学に求め、リクール、ヴァッティモ、解釈学的神学の思想家などが生産的な議論を行っている。このような点で、〈解釈学と宗教思想〉という対はすでに広く共有された課題設定であるといえる。しかしながら、〈解釈学〉の語が人口に膾炙するきっかけとなったH・G・ガダマーの解釈学と宗教思想の関係は、いまだ十分な形で問われることがなかった。このような事情を背景に、本論は「ガダマー解釈学と宗教思想」をそのテーマとして掲げる。

従来この「ガダマー解釈学と宗教思想」というテーマを掲げた研究の歴史をたどってみると、そこには〈ガダマー解釈学に対する体系的・統一的な観点の欠落〉という問題が浮上してくる。すなわち、ガダマー解釈学という一つの哲学的理論を十全な形で理解することなく、宗教的なテーマに対する応用という関心が先行してしまっているのである。よって、本論は「I. ガダマー解釈学を体系的・統一的に把握すること」という要請に妥協せず、「II. そのうえでガダマー解釈学を宗教思想に関連させること」を目指すことを課題とする。

この課題を達成するため、本研究では「解釈における〈一と多〉という構造」を取り上げ、これを〈解釈学〉と〈宗教思想〉の媒介項として用いる。一方で、〈解釈学〉にとって〈一と多〉はその本質的な構造をなしているといえる。まず、〈一〉なるテキストから〈多〉様な解釈が引き出されてくるということは人文学における自明の事実であるといえる。さらに、恣意的・相対主義的な解釈に対して主張される〈一〉つの規範的なテキストの意味と、すべての多様性を併呑する絶対的な一なる規範に対して主張される〈多〉数のテキストの意味の可能性という弁証法も、人文学の本質的な構造を描き出している。他方で、〈宗教思想〉にとっても同様の意味で〈一と多〉という構造が見出せる。〈一〉つのテキストである聖典から、時代ごとに〈多〉様な解釈が引き出されてくるということや、歴史的・批判的な方法によって再構成が試みられる〈一〉つの規範的な解釈、あるいはその背後にある唯〈一〉の歴史的事実と、それでも多様な立場・多様な観点から聖典を読むことによってそれを現代への使信となし、新たな伝統を形成してゆくという弁証法も、宗教思想の在り方として重要なものを含んでいる。

このような観点に基づいて、まず第一部では、ガダマー解釈学を宗教思想へと接続するための準備作業として、従来のガダマー研究における近年の基本的な諸問題を検討することによって、解釈における〈一と多〉という構造が彼の体系を浮き彫りにするのに適切な枠組みであることを示す。その際、〈一と多〉という構造はガダマー研究史における二つの立場である〈実在論と反実在論〉に相当することが示され、ガダマー自身がその二つのなかで実

際にどのような立場をとっているのかについての回答が与えられることになる。

第1章では、『真理と方法』のタイトルにおける二つの概念である〈真理〉と〈方法〉の関係に着目する。〈真理〉と〈方法〉は、しばしば対立(真理対方法)か二者択一(真理か方法か)の関係にあると考えられてきた。ところが、ガダマー自身はこの解釈を容認したことは一度もなく、逆に〈方法〉の契機が解釈学や人文学一般にとって不可欠で本質的であることを述べている。しかしながら、彼の自己弁護にもかかわらず、哲学的解釈学における〈理解の歴史性〉の議論は〈方法〉の否定、あるいは少なくともその軽視の疑惑をかけられ得るものであって、容易に解釈の相対主義へと導くものとなっている。ここでは、〈理解の歴史性〉における二つの相反する強調点(〈解釈の拡散〉と〈解釈の収束〉)を区別することによって、彼の解釈学をこの批判から救出することを試みる。この議論はまた、それぞれが解釈の拡散と収束に対応している〈真理〉と〈方法〉の関係性という問題にも光を投げかけることとなる。すなわち、〈方法〉の契機が否定はされていないものの、それは『真理と方法』においては主要なテーマとしては扱われていないということが指摘される。

第2章では、ガダマー解釈学を理解するために重要な句「理解されうる存在は言語である **Sein, das verstanden werden kann, ist Sprache**」を取り上げ、その影響作用史をたどってゆく。ヴァッティモによる有名な論文「あるコンマのはなし」では、この句にある関係代名詞をどのように訳すかという翻訳上の理由から、相反する二つの解釈が提出された。一方でこれを非制限用法として理解すると、「存在は言語である」すなわち存在と言語をある意味で同一視する立場が生じ、存在は言語活動によって変化させられうるという非実在論を支持するものとなる。この見解はヴァッティモ自身やローティによって代表される。他方でこれを制限用法として理解すると、存在のなかの制限された一部分が言語として理解可能なのであり、それゆえ存在は人間の言語から独立しているとする実在論を支持するものとなる。この見解はディ・チェーザレやグロンダンによって代表される。このような分析から、「ガダマーは実在論者なのか反実在論者なのか」また「『理解されうる存在は言語である』という命題はどのように解釈されるべきなのか」という二つの問いが提起される。

第3章では、「ガダマーは実在論者なのか反実在論者なのか」という問いに解答を与えることが試みられる。ガダマー解釈学の実在論的解釈を支持する研究の有力なものとしてはワクターハウザーの「視点論的実在論」が挙げられる。彼の理論はガダマーにおける重要な議論を踏まえた非常にバランスが取れたものであるが、一点のみ問題がある。それは、ガダマーの解釈学を〈実在論〉として定式化してしまっている点である。本研究の分析によれば、第1章の成果などからも明らかなように、ガダマーは観念論や相対主義の立場をとっておらず、ゆえにそれは限りなく実在論に近いものではあるが、しかしながら実在論そのものでもない(あるいは実在論という問題設定そのものを回避している)という、より複雑な立場の規定が要求されている。これは、カントにおける理念の構成的使用と統制的使用の区分をガダマーの実在あるいは自体存在の概念に当てはめることによって、より首尾一貫した理解

が可能になる。

第4章では、『理解されうる存在は言語である』という命題はどのように解釈されるべきなのか』についての回答が与えられる。この問いは、「ガダマーにおける存在論的差異はどうなっているのか」という別の問いによってより適切に理解可能になると思われる。というのも、この命題における「存在」はしばしば実在や存在者の総体という意味において理解されてしまっているが、これは存在を存在者から徹底的に区別したハイデガーと、その弟子であるガダマーの思想的連続性を考慮に入れるならば容認しえない理解であり、ガダマーにおいても「存在」は存在論的差異の文脈において理解されるべきであるからである。ここでは『真理と方法』の言語論を存在論的差異の導きのもとで首尾一貫して読解することによって、「理解されうる存在は言語である」という命題にも適切な解釈が与えられることを示す。すなわち、「存在者の存在は自己表現をすることによって、その存在者をもまた表現する。言いかえれば、存在者を言語的に理解可能にする」のである。

第二部からは、〈ガダマーと宗教思想〉という問題系に足を踏み入れることになる。具体的には、ガダマーと神学者たちの議論や影響関係を見ていくことによって、解釈における〈一と多〉という構造がその中においても見られ、解釈学と宗教思想との対論を分析するさいにも有用な観点であることが示される。

第5章では、ガダマーと神学者パネンベルクによる対論が扱われる。その争点は言語論と歴史論の二つに分けることができる。第一に言語論では、言語における〈思弁的なもの〉を論じ、言葉の背後にある「無限に多くの言われなかったこと」を強調するガダマーに対して、パネンベルクは〈陳述〉としての言語のあり方を重視し、命題が一義的・客観的に意味を他者へ伝達できることを強調する。パネンベルクの批判は確かに一面において正当であるものの、この両者の側面を複合的に有しているのか言語というもののあり方であって、これらは互いを排除するものではなくむしろ補い合う関係にあるといえる。第二に歴史論では、パネンベルクはナザレのイエスの復活において終末が先取りされているという議論をもって普遍史の構想を語り、地平の融合を論ずる解釈学はそこへと最終的に合流すると主張するが、哲学者ガダマーは最終的にその議論に同意することはできなかった。この二人の議論は、解釈における〈一と多〉という構造についての範型的な意義を有しているといえる。

第6章では、ガダマーとブルトマンにおける解釈学的構造の比較が行われる。従来の研究ではブルトマンをガダマーに近づけて解釈するという傾向が見られるが、ここでは逆にガダマーをブルトマンから分け隔てる点に焦点を当てて探求が行われる。両者の解釈学における類似した構造を比較すると、ブルトマンがテキストの解釈における観点を実存へと一極的に集中させる傾向があるのに対して、ガダマーはそのような観点を絞らず、解釈の可能性を〈多様性〉へと開いたままにしているという傾向の違いが浮かび上がってくる。これはブルトマンが実存論的解釈をあくまでも技法論としての解釈学として捉えるのに対して、ガダマーはそこから距離をとるといって解釈学そのものに対する姿勢の違いが起因している。

第7章ではガダマーが実際にブルトマンについて論じている論文をもとにして、その議論を分析する。ガダマーによれば、彼が『真理と方法』の第一部芸術論において展開した〈遊び〉の概念が、ブルトマンの聖書解釈において問題となっていた〈信仰の自己理解〉の別の側面を照らし出すことになるという。信仰の自己理解は信じる主体が自己制御の努力の末に自ら獲得できるものではなく、ただ出来事として神から与えられるものである。ゆえに、その自己理解のあり方は主体が自分自身についてコントロール権を握っている〈自己所有〉ではなく、状況の中において翻弄される〈自己喪失〉の性格を持つが、それはガダマーが論ずるところの遊びにおける主体の存在様態により近いと主張される。この対比は聖書解釈へと応用され、主体が一つ一つの手順を踏みつつ理解へといたる方法的解釈に対して、出来事としてつねに解釈者の予想を上回る対話的解釈が、聖書解釈のあり方により即していると論じられる。このような議論は、ガダマー自身は明言していないものの、解釈学をあくまで技法論と捉えているブルトマンに対するガダマーからの批判として理解することができるであろう。

第一部では従来のガダマー研究における諸問題において、第二部では神学者たちとの対論において浮かび上がった、解釈における〈一と多〉という構造は、第三部においては『真理と方法』の読解という形で改めて統一的に示されることになる。その際、『真理と方法』に直接的にはあまり登場しない〈一と多〉の構造を〈有限性〉の概念を用いて具体化することによって、間接的に〈一と多〉の構造が明瞭になり、さらに具体的な宗教的テーマとの結びつきも示されるであろう。

第8章では、『真理と方法』第二部の歴史論における有限性の概念が探求される。シュライマハーに代表されるロマン主義的解釈学からランケ、ドロイゼンの歴史学派、そしてディルタイにいたるまでの解釈学には、現在の解釈者が自らのもつ歴史性を忘却して過去を理解しようとする〈知の無限性〉の傾向が垣間見える。ガダマーはそれに対して、歴史における人間の有限性を考慮に入れた解釈学を展開する。〈先入見〉、〈伝統〉、〈影響作用史的意識〉の諸議論においては、現代の解釈者が過去からの影響にさらされていることが示される。また、過去を理解するという事は現在の解釈者がその歴史性を忘却して過去の地平へと身移してしまうことではなく、現在の地平と過去の地平をあわせもった広い一つの地平を獲得することであるという〈地平の融合〉の議論が展開される。また、現在の地平が絶えず動いてゆくゆえに〈地平の融合〉はただ一回で完結するのではなく、絶えず繰り返される出来事であり、またそのような理解の過程はつねに経験の無効性のもとにあるがゆえに、その経験の開放性が要求されることが確認される。

第9章では、『真理と方法』第三部の言語論における有限性の概念が探求される。ガダマーの批判対象である〈道具主義的記号理論〉は、事柄と言語を分離することによって言語を二次的に事柄に貼り付けられる単なるラベルとしての地位に貶めてしまい、また言語において事柄が一義的にコピーされているという誤った認識を広めることになってしまった。

これに対してガダマーは言語哲学の歴史をたどり、人間の認識が言語と一体化しており、言語によってある意味制限されたものであるという言語における有限性の思想を展開する。思想史上では長いあいだ言語忘却が生じていたが、アウグスティヌスやトマスなど中世のキリスト教思想における三位一体論において、思考と言語の一体性という考えが保持されていた。また〈思弁的なもの〉などの議論においては、言語が一義的に事柄を指し示すのではなく、そこ裏には〈無限に多くの言われなかつたこと〉が控えていることが指摘される。人間の言語は一度ですべての事柄を表わすことができない有限性を有しているがゆえに、その有限な行為を無限に行使することへと仕向けられている。このような歴史と言語における有限性がともに働くことによって、テキストが解釈される可能性の無尽蔵性が理解可能になり、聖典の解釈において働くメカニズムが明らかになる。

第10章では、『真理と方法』第一部の芸術論における有限性の概念が探求される。批判対象である〈美的意識〉とその働きである〈美的判別〉に対して、ガダマーは芸術作品の存在様態を〈表現〉と規定し、オリジナルに対してしばしば二次的と捉えられがちな上演、演奏、解釈なども本質的なものとして取扱う。その結果、説教や宗教画、そして聖餐など宗教的主題においても芸術作品と同じ存在様態や時間性が確認できるようになる。解釈学的芸術論は歴史と言語における有限性から演繹されるような応用問題なのではなく、解釈学的な構造の範型が観察でき、宗教的主題がそこに直接的に絡んでくるような特徴的な分野なのである。

終章としての「結びに代えて」においては、これまでの成果を前提としつつ、そこにもうひとひねりを加えることによって、解釈学と宗教思想のかかわらせ方に対するさらに具体的な提案が行われる。それはすなわち、解釈学と宗教思想を媒介する〈一と多〉という構造を〈翻訳〉という観点から捉えなおすという試みである。一方では、〈一と多〉の構造をもつ〈解釈〉という現象は〈理解〉という現象と内的一体性を持っているという事態を改めて確認しつつ、その内的一体性はさらに〈翻訳〉にまで拡張されうる。他方で、宗教思想の文脈における〈弱い合理性〉によるコミュニケーション可能性という現代的課題を確認し、それに対してハーバーマスの〈世俗と宗教の協同翻訳理論〉がよいモデルとなりうることを指摘し、宗教思想にとって〈翻訳〉が本質的な営みであることを示す。このようにして、解釈学と宗教思想は理解や解釈と同じく〈一と多〉の構造を持った〈翻訳〉によって媒介されることが明らかになり、解釈学的現象としての〈翻訳〉を基盤にした〈解釈学的宗教思想〉の可能性が提唱されることになる。